

溺愛幼なじみと指輪の約束

プロローグ

「ほら、渚、指を出せ」

そう言われたとき、相沢渚は彼に見惚れているところだった。

彼——目の前に立っている七つ年上の幼なじみ、近藤樹は、大学を卒業して社会人になったばかり。勤め始めてから毎日スーツ姿を見るようになり、渚は彼と会うたびにいつも、つい見入ってしまう。

春うらら。四月下旬の午後九時。

渚が自分の部屋で宿題をしていると、なんの予告もなく会社帰りの樹がやってきた。

社会人一年生の樹に対して、渚は高校一年生。

通っているのはまずまず名の通った進学校なので、気が抜けないし宿題も多い。それを知っている樹は、渚の勉強の邪魔をしてしまったかと感じたようだった。彼が一瞬申し訳なさそうな顔をする。

勉強中なら帰ると言われたら大変だ。渚は急いでノートを閉じ、もう勉強は終わったよと笑顔を見せる。

帰るといっても、樹の家はお向かいさん。両親同士の仲が良く、お互い一人つこのためか、彼は小さな頃から渚を妹のようにかわいがってくれた。渚も、樹を兄みたいに慕い続けている。

実際、樹はとても頼りになる幼なじみで、頭が良く責任感に溢れたしつかり者。

学校の勉強も、いつも彼が見てくれた。なんでも話しやすいし相談にのってくれるので、渚は進路相談を両親より先に樹にしていたほどだ。

樹を兄のように頼りにする一方で、渚は成長することに大きくなる樹への想いを抑え続けていた。その彼が言った「指を出せ」という言葉に、渚は首を傾げる。

(指？ 手でしよう?)

机に向かっていた渚は、両方の手のひらを上に向けて樹の前へ差し出す。彼を見つめる瞳は期待でいっぱいだった。

そんな彼女を見た樹は、不思議そうな顔をしてからクツと喉を震わせ、小さく笑い出したのだ。

「な、なんで笑うの」

「なんでってお前、そんな目で両手を出すから」

「だって、いつもみたいにお菓子でもくれるのかと思ったんだもん」

笑われたということは、どうやら渚の勘違いらしい。ちょっと恥ずかしくなって手を引っこめる。すると、樹は笑うのをやめて渚の頭をポンポンと撫でた。

「ごめん、ごめん。でも、あげたいものはあるんだぞ」

そう言っ、彼女の髪をくしゃくしゃと混ぜるように撫でる。渚の髪型は、黒髪ストレートの

ミディアムロング。今日は、前髪に留めたハート形のチャームつきヘアピンがワンポイントだ。

髪のがぐちゃぐちゃになってしまいうなもの、彼に撫でてもらっているのが嬉しくて、渚はえへへと笑った。

「あつ、もしかして、これを見てお菓子だと思ったのか？」

樹は、ビジネスバッグと一緒に持っていたコンビニの袋を前に出す。彼は渚の部屋へやってくる時、必ずお菓子やジュースを持ってきてくれる。そのため、渚はコンビニ袋の中身をお菓子だと思いきんだのだ。

渚がこくりとうなずくと、樹は彼女の頭から手を離れた。そしてコンビニ袋をよく整った顔の横に掲げ、ちよつと意地悪な表情をする。

「これ中身はビールだぞ。いる？」

「いつ、いらないよ」

からかわれているんだとわかっていても、突発的な出来事に弱い渚は慌ててしまう。ショートパンツから出た膝頭に両手を置いて、渚は拗ねたように唇をすぼめた。

だが、そうすると彼の発言の意味するところはなんだろう……

樹は指を出せと言った。

(指に引っかけられる……お菓子?)

渚の頭に浮かぶのは、輪の形になったスナック菓子や、駄菓子屋で売っているミニドーナツ。

渚は視線を上げて不思議そうに目をぱちくりとさせる。すると、樹が再びクツと喉を鳴らした。

「そんなに悩むな。渡しづらいだろう」

「渡しづらいお菓子……？」

「お菓子から離れろ」

樹は鞆かばんとコンビニの袋を足元に置く。そして膝頭を掴んでいた渚の左手を取り、自分の前へ引張った。

「指開かないと、やらないぞ」

「う、うん」

いったいなにをくれるのだろうか。樹がスーツのポケットに手を入れているあいだに、渚は手のひらを上にしてそろりと指を伸ばす。

ポケットから手を出した樹は、渚の手を見て一瞬なにかを考えこむ素振りを見せた。だがすぐに「まあ、いいか」と呟き、彼女の手のひらにキラリと光るものを落とす。

「え？」

渚は目を見開いた。手のひらの中央で輝いているのは、スナック菓子でもミニドーナツでもない。目を惹ひきつける、小さな銀色の指輪だ。

樹の手が離れると、渚は左手の下に右手を添え、指輪を目の前へ持つてきてまじまじと眺めた。予想外にもほどがある。

まさか樹が指輪をくれるなんて、思ってもみなかった。

「実は今日、給料日だったんだ」

言葉が出ないまま指輪を見つめていると、樹が口を開く。彼に目を向けた渚は、胸をギュッと驚おど掴つかみにされたような衝撃を受けた。

樹が、いつもの大人っぽい彼とどこか違う、はにかんだ笑みを浮かべていたのである。

(樹君……、かわいい)

樹は七つも年上の男性だ。そんなことを言えば、彼はムツとするかもしれない。

けれど、そう思わずにはいられなかった。十六年近く彼の幼なじみをやっていて、こんな表情を見たのは初めての気がする。

「なんていうか、社会人になって最初にもらった給料だし、渚に、なんか記念になるものを買ってやりたいなって思ってたさ」

「わたしに……？」

彼の表情にときめいていた胸が、ギュッと締めつけられる。

社会人になって初めてのお給料。今まで『バイト代もらったから、ケーキバイキングに連れてってやるぞ』と言ってくれたことは何度もあった。しかし初任給となれば、どことなく重みが違う。

それも、彼がくれたのは、黄緑色の小さな宝石が埋めこまれた指輪。フラットタイプで唐草かろうさの飾り彫りが施ほどこされたデザインに、渚は大人っぽさを感じずにはいられない。

しかしふと、彼女の頭に不安がよぎる。それが顔に出ているのだろう。樹が慌てたように口を開いた。

「あつ、心配するなよ。それ、プラチナっていう材質だからさ。着けていてもかぶれを起こさない

はずだ」

「プラ……チナ？」

「渚さ、シルバーとかだと肌がかぶれるだろ。アクセサリー売り場の人に聞いたんだけど、プラチナは、ほら、あの……ずっと着けていることが多い結婚指輪なんかに使われている材質で、金属がかぶれる人でも着けられるらしい」

アレルギーというほど大袈裟なものではないが、渚は金属にかぶれやすい肌質をしている。そのせいで、シルバーや金メッキを使用した手軽なアクセサリーは着けられず、女の子として少々寂しい思いをすることもあった。

服の上からでも着けられるペンダントなどと違い、指輪は肌に直接触れる。だから今まで持っていなかったのだ。樹がくれたこの指輪は、人生で初めて手にした自分の指輪だ。

樹は、渚を気遣ってプラチナを選んでくれた。しかも結婚指輪に使われている材質だと思うと、なんとも言えない特別感を覚える。

(嬉しい……)

渚の鼓動が、うるさいくらいに騒ぎ始める。

幼い頃からずっと大好きな樹が、自分のために指輪を買ってくれた。

妹のようにしか思われていないのをわかっていても、募り続ける恋心をどうすることもできない幼なじみ。

大好きな、樹が……

「凄く、嬉しい……」

渚は指輪を両手で握り、胸にあてる。呟いた直後、涙が零れて頬を伝った。

「嬉しいよ樹君。ありがとう……」

「渚……」

「わたし、こんな……こんな凄いもの、樹君にももらえると思ってなかった。……本当にありがとう。大切にするね」

「いや、渚が喜んでくれるなら、俺も嬉しい」

渚が泣いてしまったので、樹は少々慌て、机の横にあったティッシュボックスからペーパーを引っ張り出して彼女の鼻にあてた。

「ほら、泣くな。鼻水垂れるぞ」

「うん、ありがと……。ごめんね、泣いたりして……」

「……お菓子を買ってきたときみたいに、『わーい、ありがとうー』で終わるかと思っただのに」「そんなわけないよ……」

鼻水より涙を拭いてくれるほうがロマンチックだなあ……。そんなことを考えながら、渚は自分でも鼻にあてたティッシュを押さえる。

(わたしも、樹君のためになにかしてあげたい)

渚はふと、そんなことを思う。樹はいつも、渚のために色々してくれる。勉強を覚えてくれたり、悩みを聞いてくれたりするだけでなく、買い物や遊びに連れていってもくれる。

七つも年上なのだから、妹みたいな女の子によくしてやるのは当たり前。彼はそう考えているのかもしれない。

だが、それだけでは駄目だ。

一生の記念になるだろうものをもらった。自分も、彼が一生の思い出にしてくれるようなプレゼントがしたい。

「でさ、渚……。指輪のついでっていうのも、なんなんだけど——」

「樹君、わたし、決めた！」

樹はなにかを言おうとしたらしい。しかし渚は気持ちが盛り上がり、彼の言葉を遮ってしまった。

「ん？」

「わたしね、……わたしも社会人になって、初めてお給料をもらったら、樹君にプレゼントする！」

「俺に？」

「うん！ 樹君が言ってくれたみたいに、なにか記念になるもの。一生の思い出になるような……。なんて言うのかな、樹君が絶対にこれが欲しかったって思えるものを、プレゼントするね！」

渚は力説する。樹が言おうとしていた内容は気になったが、今は彼に一生の思い出に残るプレゼントをする、という目標の方が大事だ。

指輪とティッシュを握りしめたまま、渚は椅子からぴよんと下りて樹の前に立つ。

一八〇センチの樹と、一五三センチの渚。少しでも彼に近づけるよう、渚は精一杯背伸びをする。

「だから、それまでに樹君が欲しいもの、考えておいてね。あつ、でも、車とかそういうのはナシ。

わたしができる範囲のことにしてよ？」

樹になにかしてあげられると思うだけで楽しくなる。渚がはしゃいでいると、彼はふっと微笑んだ。

「わかった。そのときまで楽しみにしてる。渚、忘れるなよ」

「忘れないよ。樹君も忘れないでね」

いつも自分を気にかけて優しくしてくれる大好きな樹に、恩返しができるかもしれない。

考えただけでドキドキする。それを実現する日をもって、渚の胸はさらに高鳴った。

指輪を握りしめる手が熱い。渚は浮き立った気持ちのまま、小指を差し出した。

「樹君、指きりしようっ」

「指きりって……。なんだかガキっぽいな」

「いいでしょう。ほらほらっ」

渚はうきうきしながら樹の右手を取り、自分の小指と絡めようとする。すると、彼は自分から指を絡ませて、渚を見つめ少し意地の悪い笑いかたをした。

「本当に忘れるなよ、渚。約束だぞ」

「忘れないよー。約束ね！」

手の中にある指輪と、大好きな樹と交わす約束。

それは、渚の大切な思い出になった——

第一章 大好きな幼なじみ

春の陽射しがまばゆい、四月末日の金曜日朝。

相沢家の食卓では、ほかほかの白いご飯とお野菜たっぷりのお味噌汁が湯気をあげている。それと一緒に、出汁巻き玉子や夕食の残りの煮物が並ぶ。

天気のおかげか、今朝はとても暖かく、朝食もなおさら美味しそうに見えた。

こんな日は、今週最後の一日の仕事を頑張ろうという気持ちを養うため、ゆっくりと穏やかに朝食を楽しみたいものだ。

……と、渚は一瞬だけ考えた。

しかし、食卓の前に立った彼女は、いきなり味噌汁椀の中へご飯を落とし、ひと混ぜして勢よく食べ始めた。

「渚っ、せめて座りなさい。行儀が悪いっ」

「らって、遅れそうらんらもんっ」

エプロンで手を拭きつつ、呆れ顔でキッチンから顔を出す母に、渚は言葉を返す。

口の中に入っていたものは呑みこんでから反論したが、急ぐあまりおかしなしゃべりかたになってしまった。

「ほんとにもう。社会人になっても、やってることは学生のとくと同じねえ」

「そんなことないよ。前はスプーンでかっこんでたけど、今はちゃんとお箸を使ってるもの。ほらほら、大人でしょう」

外見だって、黒のフレッシヤーズスーツに、首元までしっかりとボタンが留められたブラウス。

嫌味のないナチュラルメイクで、つやつやとした黒髪はミディアムロングのストレートヘア。真面目な社会人一年生に見えるに違いない、と渚は思う。

とはいえ、母はどうも納得してくれてはいないようだ。

「あんたのことだから、お父さんがいたら車で送ってもらおうとか思ってたんでしょ？」

母の言葉に、渚は食べながら肩をすくめる。

——凶星だった。

渚がこの四月から勤めている建設会社は、マイカー通勤をしている父の通勤ルートの途中にある。だから遅刻回避の手段は、父に送ってもらうというのが最良だった。だが、渚が着替えてリビングへ下りてきたとき、父はすでにいなかったのだ。

こうなったら、バス停へ急ぐしかない。

「お父さんが甘いからって、いつつも頼りにしちゃって。こんな調子でちゃんとお嫁にいけるのかしら。早くもらい手が見つかるといいんだけど」

「ちよっとお母さん、かわいい一人娘を、さっさと追い出そうとしないでよ」

「自分でかわいいとか言う？ まあ、お嫁にでも行ったほうが、少しはしっかりしてくれるんじゃないや

ないかしらね」

「残念ですが相手がおりません。お母様っ」

渚はキッチンを振り返り、おどけて敬礼をする。母親の前だから恥ずかしくて隠している、というわけじゃない。

渚には、今まで彼氏と呼べる異性はいなかった。

気のある素振りを見せたり、言い寄ってきたりした男の子はいた。ただ、彼女にその気がなかっただけだ。

それにはもちろん、幼い頃から胸に秘め続けた想いが深く関係している……

「情けない自慢ねえ。そのせいで、朝帰りする娘を心配する——なんて母親の定番イベントを経験できないままよ」

「や、やあね、朝帰りならたまにしてるじゃない。先週の土曜日だって、帰ってきたのは朝の五時だったし」

「お向かいの家で眠りこけて、朝になってから帰ってくるっていうのとは、意味が違うのよっ」

予想通りのツッコミが入り、渚は「えへへ」と笑って誤魔化した。

「でも、朝帰りは朝帰りだよ。ほらほら、お母さん、心配するチャンス」

「あら？ 心配してもいいなにかがあるの？ 樹君と」

「あっ、あるわけじゃないっしょっ！」

渚は慌てて否定をする。からかったつもりが、すっかりやり返されてしまった。

朝まで眠りこけていても平気なほど、渚はお向かいの近藤家に馴染んでいる。樹にも『うちの親、実の息子より渚のほうがかわいみたいだ』と言われたくらいだ。

幼い頃、渚は両親が共働きだったせいで、親がいない時間帯は近藤家ですごしていた。

学校が終わると近藤家上がりこみ、ご飯を食べてお風呂に入って、樹に勉強を見てもらい、話をしているうちに寝てしまう。それが、高校に入学するまでの日常だったのだ。

渚が中学を卒業する頃に、母親が仕事を辞めた。勤め先に不満やトラブルがあるようではなかったが、一人娘が年頃になってきたのに傍にいられないことを気にしたらしい。

いくら幼なじみが頼もしい相談相手とはいえ、相手は歳の離れた異性。思春期ともなれば母親にしか言えないような甘酸っぱい悩みなども出てくるのではないか。……そう、心配する気持ちもあつただろう。

ただ、いいのか悪いのか、その心配は杞憂に終わっている。

母が家にいるようになってからは、渚が毎日近藤家に入り浸ることはなくなった。それでも相変わらず樹とは仲良しで、遊びに行つては彼と話しこみ、いつの間にか眠りこんで朝になってしまうことが日常茶飯事。母親にしかできない恋愛関係の相談など、今のところない状態だ。

「そういえば、樹君のお母さんも同じようなこと言ってたわ。『うちの息子は仕事ばかりで、もう三十歳になるのに彼女もつれてこない』って。樹君、男前なのに。そういう人いないのかしら。ねえ？ 渚」

話をふられたものの、あまり触れたくない話題だった。樹を想いつつも妹という枠から出られない

くなっている渚には、想像するだけでも辛い。

彼女は食べることに夢中になっているふりをして、無言になる。少ししてから味噌汁^{みそじゆ}を口から離し、何気なくキッチンへ目を向けた。すると、なぜか寂しそうな顔をした母と視線が合つてドキリとした。

(お母さん?)

渚がうろたえていると、母は苦笑いをして話を交える。

「……お勤めするようになってから寝坊するなんて初めてじゃないの? 夜ふかしでもした? 一カ月目にして、もう気が緩んだのかな?」

「うん……、ちよつと考え事しちゃつて……。眠れなくてね」

話題が逸^それたので、渚はホツとした。母がどうしてあんな寂しそうな顔をしていたのか、考える余裕はなかった。

「考え事? どうしたの、会社でなにかあるの?」

「あ、ううん。そういうわけじゃないんだけど」

キッチンから出てきた母は、渚の前にお茶が入った湯呑みを置き、心配そうな顔をする。なんだかんだと小言を言うが、やはり一人娘のことは気になるようだ。

結局は、父と同じで娘に甘い。

渚は食べ終えたお椀をテーブルへ置く。湯呑みを手に取りお茶をすすつてから、えへつと笑つてみせた。

「ほら、今日は初めてのお給料日でしょう? だからちよつと緊張しちゃったんだ」

「まあ」

母も一緒にアハハと笑うが、すぐに声のトーンを落とす。

「……せっかくの初任給なのに……。ごめんね」

「お、お母さんっ、まだ言ってるの? もういいつてば。そんなに何回もしんみりされたら、プレゼントしたわたしが申し訳なくなるでしょう」

渚は腕時計を確認しながら湯呑みを置き、足元に転がしておいたショルダーバッグを肩にかける。つい話しこんでしまったが、時間がないので急がなくては。

「ごちそうさま。いってきます」

軽く手を上げ、そそくさとリビングのドアへ向かう。渚は一度廊下に出たが、すぐに顔だけキッチンに出し、母に笑いかけた。

「ゆつくりしてきてよ。お土産^{みやげ}は、温泉まんじゅう以外のものでヨロシクッ」

そう言つて顔を引つこめ、渚は急いで家を飛び出す。早くバス停へ行かなきゃならないのはもちろんだが、先ほどの自分の言葉がちよつと照れくさかったのだ。

今日は、社会人になって初めての給与支給日。いわゆる、初任給というものをもらえる日だ。

渚はそれに合わせて、今日から二泊三日の温泉旅行を両親にプレゼントしていた。

行き先は、父の車で行ける近場の温泉。それも、夫婦パックというプランを利用している。

新社会人の初任給で無理のない範囲のもので、目を瞞^{みは}るような豪華な旅行ではないが、両親

はとても喜んでくれた。

父などは張り切って、今日の午後から休みを取ってしまったほど。

ありがちだが、今までかわいがって育ててくれた両親に、渚はなにかプレゼントがしたかったのだ。

ささやかな感謝の気持ち、とても言おうか。

そして渚には、その感謝の気持ちを受け取ってもらいたい人物が、もう一人いる。

昨夜眠れなかったのは、その人物になにをプレゼントしたら良いだろうかと悩んでいたのが原因だった。

「なにが欲しいのかなあ……」

渚は呟きながら足を速める。精一杯急いでいるつもりなのだが、パンプスでの速歩きではたかが知れていた。スニーカーを履いた男子高校生にゆうゆうと追い抜かされ、気持ちが焦る。

それと同時に、プレゼントを早く決めなくちゃという思いも募った。

感謝の気持ちをプレゼントしたいのは今日なのに、肝心の品物がまったく決まっていない。

彼の好みはわかっている。好きな食べ物、好きな車、好きな曲、服の好み。けれど、欲しがっているものは思いつかない。さりげなく聞き出そうとしたこともあったが、これというものは出ていなかった。

おまけに、思いつくのは日用品ばかり……

(まさか、シェーバーの替刃だとか、お気に入りのコーヒー豆だとかをプレゼントするわけに

も……)

渚が考え事をしながら足を進めていると、横の車道に停まった車にいきなりクラクションを鳴らされた。考え事に集中するあまり車道に寄りすぎていたのだろうか。車に目をやった途端、渚は飛び上がらんばかりに驚いた。

そこに停まっているのは、とても見覚えのある車だった。助手席の窓がさがり、楽しげな笑い声が聞こえてくる。

「なーに、固まってるんだよ。驚きすぎだぞ」

そう言われると、渚は驚いてしまった自分が恥ずかしくなった。それでも、意地を張ってムツと顔をしかめる。

渚は窓から中を覗きこみ、運転席に座る樹を睨みつけた。

「いきなりクラクションを鳴らされたら驚くよ。普通」

「悪い、悪い。お詫びに会社まで連れて行ってやるから。乗れよ」

「え……、でも……」

「なにを遠慮してんだよ。どうせ同じ会社だ。この時間ってことは、遅刻すれすれのバスに乗る気だな？ バスより俺の車のほうが早いぞ。乗れ」

「うん、じゃあ……」

最初は遠慮していたものの、渚はいそいそと助手席へ乗りこむ。彼女がシートベルトを着けるのを待ってから、車は発進した。

すぐに樹は笑いつつ尋ねる。

「いつもは一本早いバスなのに。どうした？ 夜ふかしか？」

「そんなんじゃないよ。つていうかさあ、樹君だって、この時間にここにいてるつてことは寝坊したんじゃないの？ 人のこと言えないじゃない」

母と同じ質問をされたけれど、彼にまで、悩んで眠れなかったとは言えない。

なんといつても、悩んでいた原因——渚がプレゼントを贈りたい人物は彼なのだから。

渚に同類扱いをされた樹は、ハッハッハと芝居じみた高笑いをした。

「俺は社には一時間前に入っている。始業前に今日納品がある現場を見てきて、これから戻るところだ」

「えっ……え、早朝出社？」

「渚が涎を垂らして寝てる時には、もう働いてたんだからな」

「涎なんか垂らさないよっ」

冗談だとわかっていながら、ついムキになってしまう。樹は今度は普通の声で笑い、運転席から手を伸ばして渚の頭をポンポンと撫でた。

「わかってるつて。渚が涎垂らすのは、好きなものを食つてるときだもんな」

「もーっ、垂らさないつてばっ」

あまり嬉しいからかわれかたではないが、おかげで夜ふかしの原因からは話が逸れた。心の中でホッと胸を撫でおろし、渚は改まった口調で樹をねぎらう。

「早朝からお疲れ様です。近藤課長」

すると樹は、前方を気にしながらも「おうっ」と返事をし、極上の微笑みを浮かべた。

渚が就職したのは、樹と同じ会社——白瀬川建設株式会社。建設業界のトップグループに名を連ねる一流企業だ。

樹は七年前に新卒で入社して以来、営業部第一課に所属している。

彼は二十七歳で主任になり、昨年、二十九歳で課長に昇進した。

普段から仕事熱心な樹は、もともと上役に一目置かれる存在であったようだ。そこへ加えて、公共事業に関わる大きな契約を成立させたことが、昇進の鍵となった。早い話がエリートコースに乗ったのだ。

そんな樹と同じ会社に入りたい。樹の傍にいたい。その一心で、渚は学生時代から必死に勉強をした。

白瀬川建設は一流企業だ。入社のためには努力が必要。

また、途中で脱落しないためにも、渚は自分のペースを守り根気よく勉強を続け、高校大学と上位の成績をキープし続けたのだ。

担当教授の研究室の手伝いもしたし、ゼミをさぼったこともない。夏休みをほぼ潰すと言われ、就活生には敬遠されがちの、白瀬川建設インターンシップにも参加した。

渚は、樹と同じ会社に入りたいという目標だけのため、そこまで努力したのだ。

彼とは七つ歳が離れている。幼なじみであっても、同じ学校に通えたことはない。

好きな人と同じ場所にいるのだという、幸せな気持ちが欲しかった。

渚が今まで誰ともつきあった経験がないのは、この目標を達成するために無我夢中だったことも原因である。

やがて渚の情熱は実を結び、彼女は就職活動を始めて早々に白瀬川建設の内定を勝ち取ったのだった。ただ、樹の所属は営業一課。渚が配属されたのは、営業企画課だ。営業という文字は付きこそすれ、オフィスも業務も異なる。

それでも落胆はしていない。聞いた話では、営業企画課で頑張つて成果を出した女子は、営業課に異動になることが多いらしいからだ。白瀬川建設では、営業課は花形の部署だった。

渚は今、密かにそれを目標としていた。

「そういえば渚、おじさんとおばさんに旅行をプレゼントしたんだって？」
車が赤信号で停まると、樹が顔を向けて話しかけてくる。

渚は自分に聞するだいたいのは樹に話すが、旅行の件は話していなかった。母親同士も仲が良いので、渚の母から話が漏れたのかもしれない。

「うちの母さんが感心していたぞ。『渚ちゃんは親思いで本当に良い娘さんねえ』って」

「そんなっ……。照れるよ、褒められたりしたら」

「渚はうちの親に大人気だしな。褒めもするさ。真面目で、優しくしてしっかりしていて。遊び歩いているところなんか見たことがないって、よく言ってるぞ」

「だ、だから照れるっば。やめてよ」

樹の両親に目の前で言われたのなら、『そんなことないですよ』とはにかむ程度で済む。だが、樹の口から言われると照れくささが倍増してしまう。

渚は真っ赤な顔で、両手を横に振る。しかしその動きは、信号が青に変わり車が走り出す瞬間、彼のひとことで止まった。

「俺も、そう思うぞ」

そう言つて、樹が極上の微笑みをくれたのだ。

手どころか、口も止まる。視線は、前を向く樹に釘づけになった。

(樹君……)

彼に褒められると、胸がきゅうつと締めつけられるほど嬉しい。とはいえ、褒めてもらった内容は、渚が樹の傍にいたがために必死になっていた結果。遊び歩く余裕がなかっただけというのが正直なところだ。

しかも下心があつてのことなので、本人から言われると焦りも感じる。

「だけど渚、旅行が今日からってことは、支払いとかどうしたんだ？ 旅行会社のプランなんだろう？ 先払いじゃないのか？」

「あ、カードで……。ほら、二十歳のときにつきあいで作ったやつ。初めて使ったよ。ドキドキしちゃった。引き落としは来月だから、その点は大丈夫」

「カードとか、怖いから使いたくないなって言つてたよな。言つてくれれば旅行代金くらい俺が貸してやったのに。どうして相談しなかったんだ」

「え、あの……お金のことだし。悪いかなって……」
「ふうん……」

生返事をした樹は、そのまま黙ってしまった。
今までは悩み事があれば、どんな内容でも樹に相談をしてきた。今回は初任給^{がら}絡みのプレゼントで彼にも関係があることから、話しづらかったのが本心だ。

(気を悪くしちゃったかな)

渚だって、なんでも相談してくれていた友だちが、自分にひとことの相談もなく悩み事を抱えていることを知ったら……。相談してくれてもいいのにと、残念な気持ちになるだろう。

——樹も、同じ感想を持ったのかもしれない。

チラリとでも言っておけば良かった。気まずい思いが渚の胸をいっぱいにする。なんとなく下を向いたとき、大きな手がポンッと頭に載った。

「よしっ。そうだ、今夜は飯食いに連れてってやる」

「え？」

渚が予想外の言葉に顔を上げると、赤信号で車を停めた樹がこちらを見つめていた。

「家に帰ってもおばさんがいないんじゃない、飯に困るだろう？ 仕事終わったら飯食いに行こうぜ。給料日だしな。たかっついいぞ」

「そんな……、お給料日なのはわたしも同じだし……」

「新入社員の初任給と一緒にすんな」

「……ご、ごちそーになります。課長っ」

「よしっ」

渚の頭をポンポンとして手を離すと、樹は視線を前に戻して車を走らせる。

旅行代金の件で渚が相談しなかったことは、特に気にしていないように見える。渚は密かにホッとした。

「でも、ちょうど良かった。実は樹君に聞きたいことがあったの。本当は会社帰りにでも家に来てもらうか、わたしから行くかしょうと思ってたんだ」

「聞きたいこと？ なんだ、相談事か？」

「うん、まあ。相談というか、単純に聞きたいことというか」

「ふうん……。俺もお前に確認したいことがあったから、ちょうどいいな」

「樹君がわたしに？ なに？」

「今言うことじゃないし、夜に言う。ないとは思うけど、残業が入りそうだったら教えろよ」

「残業が心配なのは樹君のほうでしょっ」

樹が渚になにを確認したいのかはわからないが、今夜食事に行く約束は、渚にとって都合がよい。七年前の約束を、彼はおそらく覚えてはいないだろう。けれど渚は、ずっとこの日を待っていた。大好きな樹に、初任給で一生の思い出になるようなプレゼントをするという約束——それをやっ
と実行できる。

なにが欲しいのかは、やはり本人に聞いたほうがいい。場合によっては、すぐにプレゼントでき

るものかもしれないし、休みの日にでも一緒に選びに行けるものかもしれない。

(一緒に選ぶとなったら、樹君とお出かけができるなあ……)

考えてみれば、休日に樹と出かけるのは就職してから初めて。社会人になったのだから、少し大人っぽさを意識した服装にしたほうがいいだろうか。

まだ出かけると決まったわけではないのに、渚は休日の予定に思いを馳せる。気がつく、車はすでに会社の駐車場へ入るところだった。

白瀬川建設の社屋は、オフィス街の一角に建つ二十五階建ての自社ビルだ。裏手には来客者用の駐車場が、地下には社員用の駐車場がある。

ただし、社員用駐車場は希望者全員が利用できるものではなく、役職付き社員が優先される。

残りほぼ年功序列で埋まっていくが、電車やバスで通勤する者や、近くの月極めの駐車場などに年間契約をしまっている者も多い。なので、運が良ければ新入社員にチャンスが回ってくることもあった。

車を所定の位置に停めつつ、樹が渚に声をかける。

「渚、のせられて飲み会の約束とかするなよ」

「し、しないよっ。樹君こそ、『給料日だから奢ちかってくださいよ』とか言われて、調子にのってご飯の約束とかしないですよ?」

「んー、ご飯食べに行く約束は、すでにしてるし……」

「え?」

「渚と」

サイドブレーキを引いた樹が、渚に顔を向けてにこりと微笑む。その瞬間、渚の胸は痛いほど高鳴り、思わず片手でブラウスの襟元をグッと掴んだ。

今日は随分と、樹にドキドキさせられている気がする。

やはり例の約束を意識してしまっているせいだろうか。それとも――

(これ、着けてきたせいかな……)

握りしめた襟元。その手の中に感じるものは、渚にとって非常に大きな存在だった。

(樹君……)

そこには、チェーンに通された指輪がぶら下がっている。高校一年生のとき、社会人になったばかりの樹がプレゼントしてくれたあの指輪だ。

いつもはバッグなどに入れて大切に持ち歩いているのだが、今日は特別な日なので身に付けてきたのだった。

二人同時に車を降りる。そのとき、樹のものと思われるスマホの着信音が鳴り響いた。

「はい。おはようございます。……ええ、現場は先に見てきました」

彼の口調からして、仕事の電話らしい。樹は車の横に立ったまま話し始めた。

すぐに話が終わるかわからないし、待っていたら彼に気を使わせてしまうかもしれない。邪魔になつてはいけないと思い、渚は「じゃあ、行くね」の意味をこめて手を振る。すると樹も手を振り返してくれた。

「よしっ、頑張るぞー」

樹と離れてから、渚は小声で気合を入れた。

それだけでなく、今夜は樹と食事に行く約束をしている。食事の席で、渚は彼にとっても大切なことを聞かなくてはならない。そのためにも、今日は滞りなく定時に仕事を終えなくては。

樹とした約束があると思えば、やる気もみなぎる。

渚は駐車場を出てビルの入入り口へ向かう。腕時計を確認すると、車に乗せてもらえたおかげで始業時間まで充分余裕がある。

今夜の約束をできたことも含め、改めて、樹に会えて良かったと思った。

「おーい、相沢あー」

背後から呼ぶ声が聞こえたかと思うと、すぐに怪訝な顔をした青年が追いついてくる。彼は渚の横に立ち、一緒に歩き出した。

「あつ、おはよう。佐々木君」

渚は彼を見てにこりと笑いかける。彼女に柔らかい笑顔向けられてやや表情を緩ませたのは、同じ新入社員の佐々木俊一だった。

とはいえ、まだ少々強面に感じる。それは、吊り目気味でシャープな顔立ちのせいだろう。

彼はすぐに表情を戻し、歩きながら渚に詰め寄った。

「お前、なんで課長と一緒に来てんの」

「え？ 近藤課長のこと？」

「課長の車に乗っていたらどう？ なんだよ、仲良くご出勤かよ。朝から見せつけてんじゃねーよ」

樹と同時に駐車場を出てきたわけではないのに、なぜ一緒に出社したことを知っているのか。渚は一瞬間に思ったが、すぐに答えが出た。

俊一は、新入社員でありながら駐車スペースをゲットできた運の良い男。おそらく、駐車場の中で樹の車から降りてきた渚の姿を見たのだろう。

「み、見せつけるって……。な、なに言ってるの。もうっ」

俊一の言葉や口調には、特別な関係を疑う雰囲気は漂っている。渚は慌ててしまった。

「言ったことあるでしょう。近藤課長とは家がお向かい同士で、ちっちゃい頃から知ってるのっ。け、今朝だって、バスに乗り遅れそうになっているところを課長が拾ってくれただけだからね」

「知ってるよ。幼なじみなんだろ？ ……なに慌ててんの？」

「佐々木君がおかしな言いかたするからでしょっ」

「怒るなって。なんなんだ、お前」

「佐々木君こそ、なんなのよっ」

ちよつとムキになりすぎているとは自分でも思う。しかし、誤解されかかっていることが、嬉し

いような照れくさいような……。否定しておかなくては樹に申し訳ないような……

「おれはさ、幼なじみだかご近所さんだか知らないけど、ほんとに仲が良いんだなって言ってるだけだぞ。課長、今年三十歳になるのに独身だろう？ 朝からそんなにベタベタしてたら誤解される

29 溺愛幼なじみと指輪の約束

ぞ。あの人イイ男だし、女子社員に人気あるみたいだしな」

「や、やめてよー。本当にそんなんじゃないし……」

渚はドキリとする。思いがけず気にしていることを指摘されてしまった。

樹が女性にもてるだろうという予感はずからあったものの、同じ学校に通ったことがないので実感したことはなかったのだ。

だが、同じ会社に入社してみると、彼を見つめる女性の姿をよく目撃するようになり、彼に想いを寄せる女性の噂話なども耳にした。渚が樹を気にしすぎているせいもあるのだが、改めて彼が女性に好かれるタイプの男性であると実感しているのだった。

会社の休憩所などで偶然会い、話をしているにも、新入社員が近藤課長に色目を使っていると言わんばかりの視線が突き刺さることがある。

初めてその視線に気づいたときは、怖くて周囲を見回すことができなかった。

今朝、樹が車に乗せてくれると言ったとき、嬉しいのに躊躇してしまった。それも嫉妬の目を向けてくる女子社員に見られたらイヤだな、という気持ちがあったからだ。

(樹君は、わたしなんか相手にしないよ……)

そんなことがあるたび、自分はただの幼なじみで、彼につり合う相手ではないと卑屈になってしまふ。俊一と話している今も、渚の頭には樹への申し訳なさがあった。

「課長に悪いでしょうっ。幼なじみで、お兄ちゃんみたいに仲良くしてた人だよ。だから一緒にいるだけなのに、そんな目で見られたら……」

「お兄ちゃん？」

「そうだよ。わたしも課長も一人っこだし……、ちっちゃいときはいつも遊んでもらって、勉強を見てもらって、それから……」

「……本当に、お兄ちゃんか？」

「え？」

ムキになって余計なことまで口にしてしまったとき、俊一が声のトーンを落とす。急に様子が変わった気がして、渚は彼に目を向けた。

視界に入った彼は、とても真面目な顔をしているように見える。しかしそれをハッキリ確認できないうちに、渚はいきなり何者かに腕を引つ張られた。

「ちよつと佐々木！ 渚を苛めないでよね！」

渚を庇う頼もしい声。一五五センチの渚よりも十センチほど背が高く、声も大きい篠崎彩乃だ。

黒のフレッシュャーズスーツに身を包む彼女は、渚や俊一と同じ新入社員。そして、渚にとつては高校時代からの親友でもある。

一人っこの渚と違って、下に弟が三人もいる彩乃ははっきりした性格の持ち主だ。その上、面倒見がよく氣遣い上手。おっとりしている渚に、誂えられたかのような親友なのだ。

「なんだよ。苛めてねーよ」

「だって、渚を慌てさせてたじゃない。まったく、あんたってば入社式るときから渚に絡んでたよね」

「またその話かよ、しつけない」

「事実でしょう。しつこくないわよっ」

「つたく、女が結託するとめんどくせーなあ」

「なんですってえっ」

——三人は、同じ営業企画課の新人である。

渚と彩乃はもともと親友同士だったが、俊一とは入社式で知り合った。絡まれたといっても、そんな大袈裟な話ではない。

入社式の日、式が始まる前、渚は彩乃の姿を探していた。待ち合わせをしていたのだが、『階段かエレベーターの辺りね』というあやふやな約束をしてしまったため、両方の周辺をうろろするはめになったのだ。

すると、運悪く俊一の進行方向をふさいだらしく『ウロウロすんなよ、そのちっちゃいの』と言われてしまった。

彼に悪気はない。口調が少々荒いだけ。しかし渚は彼の不機嫌そうな声を聞き、怖い人なのだろうかと誤解をし、固まったのだ。

ちょうどその現場を彩乃が見ていたことで、彼は今になっても、渚を苛めた容疑をかけられている。

当事を思い出したのか、俊一はふんつと鼻を鳴らした。

「だいたい、ちびがチョロチョロしてたから注意しただけだろう。あんなにちょこまか動かれたら、

誰だって邪魔に思うもんだ」

「佐々木君、酷いっ」

俊一の暴言を渚が責める。確かに彼は渚より二十センチくらい背が高い。それでも、ちびがチョロチョロとまで言われてしまつては、渚だって反抗したくなる。

彼女の言葉に便乗し、彩乃も渚の肩を抱いて俊一を責めた。

「ひどい。苛めだ、苛めだー。セクハラだー」

「セクハラとか言うなっ」

立ち止まって話をする三人。口論のような内容ではあるが、三人の表情は楽しい笑顔だった。

基本的に、仲が良いのだ。

「こら、新人。遅刻する気か」

そこへ背後から注意が飛ぶ。三人が同時に声のほうに顔を向けると、片手を上げた樹が、笑顔で近寄ってくるどころだった。

「あっ、いつ——」

「おはようございます。近藤課長」

樹の姿を見て、つい『樹君』といつもの呼び方をしそうになったが、彩乃の挨拶が重なったことでハッと気づき、渚はグツと唇を結んだ。

「おはようございます」

ワンテンポ遅れ、俊一がどこかよそよそしい挨拶をする。樹は三人分まとめて「おはよう」と返

すと、渚に顔を向けた。

「まだ社内に入ってなかったのか？ なのために先に行っただ」

「あ、うん。入り口でみんなに会って……」

「早く行けよ。遅いって怒られて残業なんか渡されたら大変だ」

「はいっ。気をつけます、課長」

樹が遠回しに、今日は残業にならないようにしろと言っている気がして、渚はにわか張り切っておどけてピシッと敬礼の真似をすると、樹はクスツと笑い「じゃあ、お先に」とビルの中へ入っていった。

（今夜は樹君とご飯に行くんだし、あのことだつて聞かなくちゃならないんだもん。がんばろっ）
渚は心の中で密かに小さなガツポーズを作る。そんな彼女をよそに、両脇の二人は話を続けていた。

「なんかさあ、新人への対応とか、スマートで嫌味がなくてカッコいいよねえ、近藤課長。顔も性格も良くて仕事ができるって、冗談みたいな人だわ」

「そうか？ カッコいいっていったつて、あの人三十歳だろ、中年じゃん……いつてえっ！」

話の途中で俊一が叫び声をあげる。渚がかかとで俊一の足を踏んづけたのだった。

「ちよっ……、相沢っ」

「そういう嫉妬しつとみたいなセリフはさ、同じくらい仕事できて、新人ウケの良い上司になってから言つてよね」

樹を悪く言われていると感じて咄嗟とつさにやってしまったが、いきなり足を踏んだのは乱暴だったかもしれない。今まで、そんなことはしたことがなかったのに。

ただ本当に、樹を悪く言われたのがイヤだった。

——樹のことをなにもわかってないくせに。渚の心は、そんな思いでいっぱいだ。

自分から謝るのも癪しやくに障る。口を開きかけた俊一を待たずに、渚はさつさとビルの中へ入った。

エントランスホールを見回し、樹を探す。だが、すでに彼の姿はない。

渚は自然に襟元えりもとに手を伸ばし、ブラウスの上からそこにあるものをキュツと握った。

「よしっ、頑張るぞー」

何度目になるのかわからない気合を入れ、渚は足を進める。

彼女の心は、今夜の約束に浮き立っていた。

特になんの問題もなく午前中の仕事を終えた渚は、昼休みを利用して一人会社を出た。

お昼はいつも、お弁当か社員食堂を利用して、彩乃や同じ課の先輩と一緒に食べる。

今日に限って一人で外へ出たのは、銀行の通帳に記帳をしたかったことが第一の理由。そして、

今夜のことが気になって落ち着かなかつたせいでもある。

会社に近い銀行で記帳を済ませた渚は、隣に建つ小さなコーヒースタンドへ入った。

中はカウンター席が数席と、二人用のテーブルが五台ほど並んでいる。オーダーカウンターは賑にぎわっているが、食事を目的とした店ではないためか、テーブル席はふた組の客が埋めているだけだ。

渚は用意してもらったアイスコーヒーと小さなマフィンをプラスチックのトレイに載せ、壁側の席に座った。

いつもより断然少ないお昼ごはん。それというのも、今夜のことを考えると胸がいっぱいで食欲がないのだ。

「うわあ、なんか、社会人になったって感じ」

記帳してきた通帳を開き、渚は興奮気味に呟く。印字された「キュウヨ」の文字。アルバイトの経験はないので、自分の通帳にこんな文字が入るのは初めてだ。

経理課で明細をもらい金額はわかっていたが、通帳で見ると初任給というものの感動を改めて実感する。

アイスコーヒーのストローに口をつけ、渚は考えこんだ。

ひとまずは、両親の旅行代と家に入れる分を差し引いた金額から、樹へのプレゼントの予算を考えなくてはならない。

今回は旅行をプレゼントしたこともあって、母は家に生活費を入れなくてもいいと言ってくれた。父も、新人のうちにはそんなにたくさんもらえるわけではないのだから、一年くらいは家に入れなくてもいいとまで言っている。だが、渚としては、そういうわけにもいかないと思うのだった。

とはいえ、もしも今月は家の分を免除してもらえらるなら、予定よりも多く樹に回せる。

(都合いいなあ、わたし)

樹のことばかり考えてしまう自分に気づき、渚は一人であるにもかかわらず、頭を掻いて照れ笑

いをした。

「樹君……、なにが欲しいんだろう」

ポツリと呟き、彼女は首の後ろに両手を回す。そこにかかるチェーンの留め具を外して、ブラウスの首元から引つ張り出したそれを手のひらに載せた。

「こないいものをもらったんだもん。樹君にも、喜んでくれるものをプレゼントしたいよね」

手の上には、細いチェーンに通された小さな指輪がある。唐草からくさの飾り彫りほじりが施され、小さな黄緑色の寶石が埋めこまれたプラチナリングだ。

樹が初任給で買ってくれた指輪だ。

あの日のことは、今でも鮮明に思い出せる。

樹の言葉、向けてくれた微笑み。それらがどれだけ嬉しかったか、どれだけ感動したか。

この指輪を、渚はずっと大切にしてきた。傷をつけてしまうのが怖くて、指にはめたことはない。また、もらってしばらくは、ジュエリー用の小さな袋に入れて持って歩いたほどだ。

その後、もつとこの指輪の存在と樹の気持ちを感じたくて、渚は傷をつけずに身に付けて歩ける方法を考えた。

そして思いついたのが、ネックレスのように首にかけるという方法だった。それも、服の中に入れておけば、めったなことでは傷つかないだろう。

渚は指輪の色に合うよう、自分の貯金でプラチナのチェーンを購入した。

そこに指輪を通し、首にかけられるようにしたのだ。とはいえ、当時はまだ高校生だったので、

そんな金額が張るものは買えなかったが。

そして大学受験や入社試験など、ここぞというときに、必ずお守りにして首にかけていた。「朝から樹君と出社できたし、ご飯も誘ってもらったし、今日は良い日だ。うん」

渚は、指輪をキュッと握りしめ、ゆっくりと息を吐く。

大好きな樹になにかしてあげられるという喜びと期待で、胸がいっぱいだ。

——その思いに浸るあまり、会社へ戻らなくてはならない時間まで、マフィンを食べることを忘れてしまっていた。

その日の夕方、渚のスマホに樹から、仕事を終えたら会社近くのコンビニの駐車場で待っているとメールが入った。

予想通り、渚に残業の心配はない。しかし、樹は定時で仕事が終わるのだろうか。

もしかしたら、コンビニの駐車場でしばらく待ちぼうけを食うのでは……

そんなことを考えながら、課員のデスクからコーヒーカーップや湯呑みなどを片づけていた定時直前。初任給も出たし飲みに行かないかと、俊一をはじめとした同僚たちが話す声が、渚の耳に入った。

もしかしてと覚悟したとき、渚にも俊一から声がかかる。

「相沢ー、仕事終わったら……」

「んーとつ、きよ、今日は、仕事が終わったらまっすぐ帰らなくちゃ。両親がいないから留守番し

てなくちゃならないんだ」

「……なんだそれ。小学生かよ」

「い、いいでしょうっ。人の家庭事情に口出ししないでよ」

不自然な言い訳に聞こえたのか、怪訝けげんそうな顔をする俊一から視線を逸らし、渚はそそくさとオフィスを出る。そのまま給湯室へ移動し、片づけも終了だ。

それ以上は突っこまれることもなく、定時に会社を出た渚は、急いで指定されたコンビニへ向かった。

来るのは樹のほうが遅いだろう。そう思っていたが、コンビニの駐車場に到着すると、樹はすでに自分の車の前で待っていてくれた。

「は、早いね。樹君」

「給料日だから絶対に飲みに行こうって誘われると思ってさ。二時間前に会社を出て、外の仕事を済ませて直帰するって連絡入れておいたんだ」

「わあっ。ズルいですねー、課長」

「今夜は渚が優先だからな」

助手席のドアを開けながら樹が見せてくれるのは、渚が大好きな極上の微笑み。渚はこの顔に弱い。見惚みとれてなにも言えなくなる。

ときどき、彼はわかっかけていてこんな表情をするのではないかと思ってしまう。

二人を乗せた車が走り出す。気持ちがあふと緩み、渚はハアッと大きな息を吐いてしまった。

「……おなかすいた……」

彼女の泣きを聞いて、樹はクツと喉を震わせる。笑いを噛み殺しているらしく、肩が小刻みに震え出した。

「ちよつと樹君、笑わないでよ」

「だってお前……、いきなりそんな切なそうに腹減ったとか言われたら、笑うだろう、普通」

「腹なんて言っていないっ。おなか言って言ったのっ」

「同じだろう」

「同じじゃないものっ」

同じだが認めたくない。それに、好きな人の前では女の子らしくしたい渚としては、せめて言い訳をしたいところだ。

「だって、お昼ちゃんと食べられなかったんだよ。おなかすくでしょ」

今度は小さく息を吐いて、渚は助手席にもたれかかる。前方へ目を向けると、フロントガラスを流れる景色が視界に入ってきた。

「そういえば、どこへ食事に行くのだろう。肝心なことを聞いていなかった。」

（ファミレス、かなあ。大学の頃よく連れてってもらったハンバーグレストランとか？）

そんなことを考えていると、笑いがおさまった樹が口を開く。

「どうせ渚のことだから、飯連れてってもらえるー、わーい、とかワクワクして昼飯食べなかったんだろう」

「そっ、それはあ……」

「当たり前だろ」

「……なんでわかるの……」

言い当てられてしまい、渚は拗ねる。すると運転席から伸びてきた手が、彼女の頭をコンツと小突いた。

「生まれたときから見てるんだ。お前がやりそうなことはすぐわかる。お前のことを一番よく知ってるのは俺だぞ」

ほわつと、渚の頬が温かくなる。赤面してしまったことを悟られるのが恥ずかしくて、助手席の窓側へ顔を逸らした。

「そっ、そんな言いかたしたら、うちのお父さんとお母さんに怒られるんだからね。『生まれたときからなら負けない』って」

「そのうち、おじさんとおばさんを追い越すからいいんだ」

樂しげに笑う彼の声を聞きながら、渚はなにも言えなくなる。

親を追い越すくらい渚を知ると口にした樹。彼は話の流れとノリで言ったのかもしれないが、渚としては意識してしまう言葉だ。

（なんか、今日のわたし、考えすぎじゃない……？）

助手席の窓ガラスに、ちよつと困った顔をする自分が映っている。運転席の樹がチラリと渚に視線をよこして微笑んだ様子も見えて、彼女の頬はさらに染まった。

——気のせいでなければ、今夜の樹はどこか違う……

「着いたぞ」

樹に声をかけられ、改めて窓の外に目を向ける。外に見えるのはファミレスでもハンバーグレストランでもない。もっと大きな建物だった。

「樹君……。ここ？」

「ここだけ？」

そこは、結婚式や各種展示会、イベントなどでもよく使われる大きなホテルである。

一瞬まさかと思ったが、彼はためらうことなく駐車場へ入っていく。

「限定ダイナーバイキングの予約が取れたんだ。コース料理なんかより、好きなものをちよこちよこ取って食べるほうが好きだろう？」

「うん。まあ、好きだけど」

「目移りして食いすぎたら動けなくなるぞ。ケーキバイキングに連れてったとき、腹苦しくて動けなくなったことがあっただろう」

「こっ、高校生のときの話でしょうっ」

笑いながら樹が車を停める。昔の話を持ち出されて食ってかかつてはみたものの、渚はシートベルトを外しつつ控えめな声を出した。

「でも、ここ、高級ホテルでしょ。その限定ダイナーって……。バイキングでも高いんじゃないの？ ファミレスとかでよかったのに」

「そういうことは気にしないで素直に奢^{おご}られる。せつかくのダイナーが不味^{まず}くなるぞ。……それに……」

シートベルトを外し、樹は申し訳なさそうな顔をする渚の頭を、軽く小突く。

「今夜は特別だから。いいんだよ」

小突かれた頭に手をあてたまま、渚は車を降りる彼の姿を見つめた。

(特別？)

特別とはどういう意味なのか。確かに渚にとっては特別な日である。七年前の約束を果たせるかもしれない日なのだから。

樹も、渚が社会人になって無事に一カ月目を迎えられたお祝い、くらいに思ってくれているのだろうか。

ぼんやりと考えていると、樹が助手席のドアを開けた。

「ほら行くぞ。俺も腹減った」

「あ、うん」

よくわからないけれど、考えるのはあとでもいい。今はとりあえず、空腹を満たすことと、樹に欲しいものを聞くことが先決である。

ダイナーバイキングだということで、そのままレストランへ向かうのかと思ったが、ホテルへ入ると、樹は渚をロビーで待たせた。

「ちよつとそこで待ってろ」

そうやって彼が一人向かったのはフロントだ。遠くから彼の様子を眺めていたところ、対応したフロントの男性からなにかを渡され記入しているのが見えた。

限定ディナーというくらいだ。予約のチェックをするために、フロントで受付をしなくてはならないのかもしれない。

渚はロビーのソファにちょこんと座り、豪華なシャンデリアがかかる天井を仰ぐ。

ここ「シフォン・ヴェール」は、ブライダル関係に力を入れている一流ホテルで、ブライダルフェアなどがよく行われている。

ホテル内の各種レストランや、カフェの限定メニューを掲載した広告がたびたび新聞に入っているの、渚もよく知っていた。

(今月のチラシは見たけど、限定ディナーバイキングなんて企画載ってたっけ?)

考えているうちに樹が戻ってきた。「行くぞ」と促され、彼について行く。

エレベーターに乗るのかと思えば、樹はロビーから二階へ続く豪華な曲がり階段のほうへ歩いて行った。

「樹君、エレベーター……」

「会場が二階なんだ。ここから行くこうぜ。なんかこの階段、外国の映画に出てくる階段みたいで趣があるだろう? 上がってみたくないか?」

金糸で刺繍がされたベージュの絨毯が敷かれた広い階段に、凝った細工が施された手すり。確かに外国映画などで、ドレスアップした紳士淑女が下りていきそうな雰囲気がある。

「本当だね。なんか、いかにも会社帰りですっていうスーツ姿で歩くのが申し訳ない感じ」

「こういうとこ、ウエディングドレス姿の嫁さんをお姫様抱っこして下りていたら、カッコいいだろうな」

「いつ、樹君、なんか発想がロマンチックだよ」

からかいながらも、渚は樹の言葉にドキドキしてしまう。そのシーンを想像したら、自分がスーツ姿であることが、少し悔しく思えた。

二階へ上がると、両開きのドアが片方だけ開いたホールが目に入る。ドアの前に立つのは、ベストスーツに蝶ネクタイの男性従業員。

樹が彼へ近づき、内ポケットからカードらしきものを出して見せると、「こちらへどうぞ」と中へ促された。ここが限定ディナーの会場らしい。

室内には丸いテーブルが二十台ほど。壁側に並べられたテーブルには、色とりどりの様々な料理が並べられている。落ち着いた照明の中、流れるのはピアノの音色。案内されたテーブルにはキャンドルライトがともし、ロマンチックな雰囲気が漂う。

限定と名が付くだけあって、特別感たっぷりだった。

「渚、カクテルかなんか飲むか?」

「あ、うん。甘いのがいい」

「苦いの苦手だもんな」

樹がテーブルに呼んだウェイターにアルコールを注文する。そのあいだ周囲を見回していた渚は、

客のほとんどが若い男女のカップルであることに気づいた。

(週末のカップル限定とか?)

そのカップルという枠の中に自分たちも入るのだと思うと、急に恥ずかしくなってしまう。

その考えを振り払おうと頭をぶんぶん振り、ハツとした。

「い、樹君、車なんだし、アルコールは……」

「ん? なんだ?」

気づいたがもう遅い。彼は注文を済ませ、ウェイターはすでにテーブルを離れている。

だが、まだアルコールが運ばれてきたわけではない。今ならば取り消すことができる。

「車で来てるんだから、お酒は駄目だよ。ソフトドリンクにしよう? わたしもお酒は飲まないから」

「いざとなったらタクシーで帰るよ。……まあ、大丈夫だとは思うけど」

「大丈夫って……。樹君がお酒に強いのは知ってるけど、酔ってる自覚がなくても、飲んだら運転しちゃ駄目だよ」

「酔っても、醒めたあとなら運転していいんだろう? 飲酒運転はしないさ」

「……それはそうだけど……」

飲ん得から一時間や二時間で、アルコール分がすっかり抜けるものではない。渚は、彼がなんと言おうと帰りはタクシーを利用して帰ろうと、固く心に決めた。

そんな渚を、樹が促す。

「それより、料理取ってこよう。たくさん食べよ」

「うん、ごちそうになりませう」

「デザートばかり取るんじゃないぞ。ちゃんと食べよ?」

「大丈夫だよ。少しずつ取って全種類食べる」

「……五十種類あるんだぞ」

「ひえっ」

渚がふざけて戦く。立ち上がった樹は、彼女の後ろへ回り椅子を引いてくれた。

「食べられないものを取ったら回せ。食ってやるから」

「う、うん」

さつきから感じている疑問が、またもや渚の胸に湧き上がる。

(樹君、なんとなくいつもと違う?)

渚に優しく接してくれるのはいつものこと。それこそ、本当の兄妹であったなら『よいお兄さん』と言われるレベルだろう。

しかし今日の彼の優しさは、どこか甘ったるい。

(気のせい?)

渚の頭は疑問でいっぱいになりかけた。しかし、ズラリと並ぶ料理を改めて見た瞬間、その鮮やかさと豪華さに心を奪われる。

樹の態度は気になるが、それでなにか困っているわけでもない。特に深く考える必要はないはず

だ。渚は他に、考えなくてはならない大切なことを抱えている。

「ほら渚、皿」

「はい」

渚は皿を受け取り、ひとまず気持ちを食欲へ傾けた。

それから一時間半ほど経った頃、メニューの半分ほどで白旗を上げた渚は、椅子の背もたれに深く寄りかかり、息を吐いた。

「少しづつとはいええ、やはり五十種類にチャレンジするのはきつい。」

「まだ半分食べてないのに、もつたいたいなあ。でもおなかいっぱい」

「おなかいっぱいとか言いながら、目の前にケーキだのアイスだのを置いていたら世話ないな」

「食後のデザートは別のおなかに入るんだってば」

「牛かつ」

渚が食後のデザートに選んだのは、アップルパイのバニラアイス添え。これは、実はふたつ目のデザートだ。

樹が選んでくれた甘口のスパークリングワインは、デザートにもとてもよく合う。そのせいで、いつになく少々飲みすぎてしまっている気がした。

ハーフボトルを注文したので、樹も同じものを飲んでいる。ソフトドリンクやビールはグラスでもらえるが、ワインはボトルでの注文になるらしい。ハーフでも渚一人では飲みきれないので、つ

きあってくれているのだろう。

「樹君、ビールとかにすれば？ 甘くて物足りないんじゃない？」

「そんなことないぞ。渚と同じ酒で酔えたら最高」

「そ、そう？」

「いちいち彼の言葉を意識してしまう。やっぱり今日は自分がおかしいのかもしれない。」

「なんならまた連れてきてやるよ。全種類食べられなくて悔しいんだろう？」

「えっ、本当に？」

「メニュー内容は変わっているかもしれないけどな。その前に、このプラン自体が継続していればの話だが」

「じゃあ、今度はわたしが奢るよ。樹君にはいつも美味しいもの食べさせてもらってるし」

「ちょっと張り切ったところで、渚は本日の目的を思い出した。今度は奢るとい話をする前に、彼が望むプレゼントを聞かなくてはならない。」

「あ、あのね、樹君。わたし、今日聞きたいことがあって……」

言いながら、渚は座り直し背筋を伸ばす。樹は、口につけていたグラスをテーブルに置いて身を乗り出した。

「そういえば朝、なんか聞きたいって言ってたな」

「うん、これなんだけど、覚えてる？」

渚は首の後ろに手を回し、襟に隠れたチェーンを引く。ブラウスの首元から上がってきたそれを

つまみ、そこに下がった指輪を取り出した。

樹が、ちよつと驚いた顔をする。だが彼はすぐに目を細め、とても嬉しそうに微笑んだ。

「なんだよ渚。そんなところに着けて歩いていたのか」

渚の鼓動が大きく跳ね上がる。表情のみならず、彼の口調も嬉しげに聞こえたからだ。

「覚えているに決まってるだろう。ちよつとよかったよ。俺の話も、それに関することだったんだ」

「そうなの？」

「そういえば、樹も渚に確認したいことがあると言っていた。もしかして彼は、昔プレゼントした指輪を、渚がちゃんと持っているのか聞きたかったのではないか。」

樹にもらったという嬉しさのあまり、渚は指輪を大切に大切に扱い、指にはめることはおろか人前に出したこともない。持ち歩いているという事実には、自分一人で満足していたところがある。

樹としては、せつかくプレゼントしたのに着けている場面を見たことがないと、不満に思っていたのかもしれない。

もしくは、喜んでいたように見えても気に入ってもらえていなかったと、不安だった可能性もある。

「わたしね、これをこつやつてチェーンに通して、たまに首にかけていたの。指に着けて傷が付いたらイヤだつて、そんなことばかり考えちゃつて……」

「そうか。大事にしてくれていたんだな」

「もちろんだよ」

嬉しそうな顔をする樹に、渚は大袈裟おおげさなくらい大きく頷く。着けたところを見せたことがないのは気に入らなかつたからだとは、間違つても思われたくない。

渚は、指輪をブラウスの上に出したまま本題に入った。

「これをもたらったとき、わたし、樹君に言ったことがあるんだけど……。樹君は覚えてないよね……」

「初任給が出たら、同じように思い出に残るようなものをプレゼントするって話だろう？」

渚は目を見開いて樹を見た。

「樹君……。覚えていてくれたの？」

「もちろん。あのときは指きりもしたしな。今夜、俺が確認したかったのもその話についてだ」

「そつかあ、じゃあちよつとよかったね」

二人揃つて同じことを考えていたようだ。

なにはともあれ、樹が指輪の件を誤解しているのではないとわかり、渚はホツと安心した。

「でね、わたしづつと考えていたの。でも、樹君が欲しがるような思い出に残るプレゼントが思いつかなくて。……ううん、樹君の趣味とか好きなものとかはわかっているつもりなんだけど。今欲しいもの、つて考えると……」

「それで、直接聞こうと考えたわけ？」